

# 南米スポーツ史研究史概説、及び20世紀初頭ウルグアイ、チリ、アルゼンチンにおける近代スポーツの国家的制度化に関する比較史研究

松尾俊輔（東京大学総合文化研究科博士課程）

キーワード：近代国家、制度化、スポーツ史、ヒストリオグラフィー、比較史

## 報告要旨

本発表の前半部では、南米スポーツ史の研究史を概観した。南米スポーツ史研究は2000年代以降着実な進展を見ているが、その多くがスポーツの「民衆性」や「象徴的意義」を強調してきた。とりわけ人種や国家、ジェンダーなどのアイデンティティが、スポーツをめぐるメディア表象を媒介に（特に周縁的セクターの間で）いかに形成されてきたかが中心的関心となっている。もうひとつの重要な主題が、世紀中葉のポピュリスト政権によるスポーツ政策だが、これらの研究はスポーツと政治との結びつきをこの時代に特異なものに見做す傾向がある。換言すれば、南米スポーツ史研究の多くはスポーツを本質的に「民衆文化」として捉え、その歴史を旧来の大きな歴史を相対化するものとして描く一方、そうした想定から外れスポーツと国家政治とが明白に結びつく局面は、特殊な例外として理解されてきた。

だが発表者は、スポーツをむしろ政治と社会の歴史的ナラティブの中心にこそ位置付けて論じることを提起する。その上で後半部では、20世紀初頭のウルグアイ、チリ、アルゼンチンのスポーツ史を、立法と行政の一次資料を基に、その国家レベルでの組織化をめぐる法制度的展開に焦点を当てて比較した。これにより、19世紀末以来瞬く間に大衆化したスポーツを前に、三つの国家がそれぞれ取り持とうとした関係性のあり様が明らかになる。具体的には、早期に国家主導の「上からの」制度化を進め、安定した国家-スポーツ間の制度的関係を築いたウルグアイ、逆に私的イニシアチブによるスポーツの組織化が先立ち、その「下からの」圧力に応える形で始まった公的スポーツ政策は、しかしながら逆に市民社会との軋轢を招き、結果としてスポーツ行政上の制度的安定を確保しえなかったチリ、そして行政組織を通じた制度的介入に代わって、スポーツへの公的支援としてクラブと政治家との間の個人的非制度的恩顧関係が卓越したアルゼンチン、という対比が見て取れる。この三者三様の国家-スポーツ関係構築の過程は、国家と市民社会との関係構築即ち近代国民国家形成という政治社会史的プロセスの枢要の一部として理解されねばならない。

〔主要参考文献〕

Guttman, Allen

1978 *From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*, New York: Columbia University Press.

Matsuo, Shunsuke

2014 “¿Pasión de multitudes o más allá de eso? Una observación historiográfica sobre el deporte sudamericano y una revisión de la historia del deporte chileno”, *SudHistoria*. n° 8, pp.10-36.